平成29年
恭賀新禧（きょうがしんき）
臨済宗・妙心寺派　松岩寺
住職　花岡博芳　祝敬

360-0815 埼玉県熊谷市本石 1-102 TEL 048-522-1812 FAX 522-9189
chief@shoganji.or.jp www.shoganji.or.jp

編集後記

◇『はだかの王さま』という童話をご存じでしょう。王さまは、詐欺師が織った利口者しか見えないという布の服を着て街を行進します。布地なんて見えないけれど、誰も言えない。とつぜん、小さな子どもが言う。「王さま、はだかだよ」。こういうのって日常生活でありますね。天下の大吟醸ともてはやされる高級酒よりも普段呑んでいる燗酒の方が口に合うのだけと、味のわからないただの呑ん平と思われるのも癪だから、「さすが○○」なぞと心にもないことを言ってしまうなんてことが。

◇「もしかして、こんなことは自分だけだったら恥ずかしい」と思って、正直に言えないことありませんか。旧年は夏目漱石没後百年でした。正直に白状すれば、あまたある漱石の小説の中できちんと完読したのは『門』だけです。『我が輩は猫である』なんて、何度も挑戦したけれど、最後のページまで未だたどり着いていない。『坊っちゃん』だって、道後温泉へ行く部分しか読んでいない。だから、今年は漱石を追っかけてみようと思います。

◇漱石の『門』は鎌倉の円覚寺を舞台にしています。松岩寺の本山は京都にある妙心寺だから、京都へいく機会はあっても、鎌倉は縁遠かった。「見つけた」欄にも書きましたが、昨秋鎌倉の円覚寺を訪れる機会がありました。皆さんと行く「鎌倉散歩」のことが頭にあったので、「機会があった」と言うよりは「機会をつくった」と言ったほうが適切かもしれません。

◇高崎線が東海道線と直結したおかげで、鎌倉も便利になりました。大船駅で一回乗り換えなくてはいけないけれど、熊谷から普通列車に乗りっぱなしで2時間あれば、北鎌倉駅に着きます。長時間普通列車に乗り続けることが楽しいと思う人もいるし、苦痛な人もいます。左の欄でご紹介した禅語「鶏寒上樹鴨寒下川」の世界です。住職はどちらかと言うと最近は普通列車派です。

◇こんなことを書くと、「いいな、和尚は。好きな所へ旅行ばかりして」なんて思われるかもしれません。でも、鎌倉へ行った時も、急用（お通夜）ができて、勉強会に出た翌日は、朝5時37分大船駅発上野東京ラインに乗って帰ってきたのです。（住職記）

ある檀家さんからいただいた写真をかかげました。写真展に応募した作品のようです。ご自身でつけたタイトルは、「気になる収穫」。

撮影の状況を熟知している撮影者には失礼だけど、いつ、どこでどのように撮られたのかまったく知らないよそ者が、別の名を勝手につけてみたらどうなるでしょうか。

たとえば、「渚にて」なんていうのはいかが。そんな映画がありました。響きは綺麗だけど、核戦争を題材にした恐い映画でした。

あるいは、「明日は月曜日」ではどうでしょうか。岸辺の陽光とはあべこべに暗くなります。

ならば、「シングルファーザー」はだめですか。もしかして、画面の外側にお母さんも歩いていたとしたら、ねつ造になってしまう。

何が言いたいかというと、同じ写真でもラベルの付け方で印象が異なるのです。同じものを見てもそれぞれ感じ方がことなり、行動も違ってきます。

chida kanji

たとえ、人生のある時期に「おなじ花をみて、美しい言った二人」であっても、いつしか「心と心が通わなくなる」のが世の常道です。

こうした雰囲気をあらわすために、禅語は綴ります。

「鶏寒して樹に上り鴨寒して水に下る」。

おなじ寒さでも、鶏と鴨では避寒対策がことなるというのです。

この句を日常生活で強く実感するのは、エアコンの温度を調整する時です。寒いという人もいるし暑いという人もいる。万人に対しての適正温度なんていうのは存在しないのではないか。室温に対して許容範囲の広い柔軟な誰かが、我慢して正しさが保たれているだけです。

柔軟っていいですね。そうありたいと思い、新年は「ベターッと開脚」に挑戦しようと誓いをたてた私です。（住職記）

連続シリーズ「見つけた」

見つけた！

「大道長安に透る」という禅語の語源になっている問答です。つまり、仏教といっても、禅といっても、特別なものではなくて、日常生活の中にいくらでもあるよ。といったところでしょうか。そこで、街頭に禅を探し、現代に仏教を見つけるコーナーをつくりました。

今回は鎌倉で、墓女を追いかけて見つけたのは！

禅にこんな問答があります。原文は漢文ですが、現代語に超訳してみます。修行僧がお師匠さんに尋ねます。

「道とは何ですか」「道か、その垣根の外にあるやないか」「そんなちっぽけな道ではありません。天下の大道を尋ねているんです」「大道か、それならば新幹線が通り、高速道路もあるじゃないか」

歴史好きの女性たちをさす「歴女（れきじょ）」なる言葉が一般的になったのは、いつの頃からでしょうか。だいぶ以前のような気がしますが、歴女の中には、墓女（はかじょ）と呼ばれるグループもあるといいます。

つまり、自分が思慕する歴史上の人物の墓所を巡る女性たちのことです。身近な家族や親戚の墓参りだっておぼつかないというのに、著名人とはいえ他人の墓所をなぜ訪れるのか。

終焉の地には、その人の生き方が色濃く反映されているからでしょう。

だからと言って、仏僧の私が他の寺へ行って著名人の墓参りをするかというと、あまりしない。なぜなら、墓参したらお経のひとつもあげなくてはならないし、その寺のご住職に偶然会ってしまったら、「墓女の実体調査に来ています」なんて言い訳をするわけにもいきません。

そんなわけで、行ってみたい墓所はいつくかあるのですが、腰が重くなっていました。しかし、旧年十一月初旬、鎌倉の円覚寺で勉強会があったので参加するついでに、円覚寺とは至近にある東慶寺を訪れたました。東慶寺は別名「縁切寺」とも、「駆込寺」とも呼ばれています。

その由来についてはご存じの方もおおいでしょうから、ここでは書きません。そのかわり、寺のパンフレットに記載されている東慶寺内に眠る著名人の名を連記してみます。

○岩波茂雄○西田幾多郎○鈴木大拙○高見順○和辻哲郎○田村俊子○小林秀雄○谷川徹三○出光佐三○前田青邨○大松博文○織田幹雄。

すごいでしょう。派手な芸能人の名前を期待した方は、がっかりするかもしれないけれど、哲学者あり作家あり企業人あり。

ここで、クイズです。写真に掲げたのは庭の置物ではなくて、どなたかの墓石です。先に列記した中にもちろん名を連ねています。誰でしょう。

ヒント1。この人が書く文章は以前は大学入試によく出題されていましたが、曖昧な文体と批判され近年は出題が減っていました。しかし、数年前のセンター試験に出題されて話題になりました。

ヒント2。いろいろな肩書きがありますが、文芸批評家です。

おわかりでしょうか。小林秀雄（一九〇二～一九八三）です。秀雄は「生前に鎌倉東慶寺に墓地を求め、そこに本居宣長が愛した山桜を一本植えていた」とは、山田風太郎著『人間臨終図鑑』（徳間書店）の記述です。しかも、墓石になっている五輪塔は骨董屋で見つけた鎌倉時代のもので、自宅の庭にすえていたものを墓石に転用したようです。骨董を自分の墓石にしてしまうとは、古美術の鑑定にも秀でたいた故人らしい。終焉の地には、その人の生き方が色濃く反映されているのです。

東慶寺は夏目漱石の坐禅の師で、漱石の葬儀の導師もした釈宗演老師も住職しました。今春、そんな鎌倉を「漱石と禅」という視点から、散歩したいと思います。ご一緒しませんか。